令和元年度 月刊 校長通信９号

（生徒・保護者版）　R１.12.26（１２ 月号）

俊英NOW

●女子ソフトテニス団体 県大会初優勝！

選抜ソフトテニス県大会で、女子団体が、初優勝を勝ち取りました。創部以来の快挙です。（メンバーは、合津未海・篠田真帆・碓井姫乃・榎本優紗・小林まどか・服部美咲）

団体男子は、2 回戦で敗退しましたが、個人戦では実力を発揮し、優勝（西沢・若月ペア）準優勝（橋詰・柏木ペア）を勝ち取りました。１月に行われる北信越で全国大会を目指します！（団体戦：女子　個人戦：男子４ペア）

●信濃毎日新聞　12 月 19 日

目には見えない災害被害も

10代

台風で被災し、避難所で過ごす子どもたちを元気づけようと企画された「わくわく広場」へ、ボランティアに行きました。何回か子どもと関わるボランティアをしたことはありましたが、今回はいつもとは違いました。台風で怖い思いをしたり、避難所生活で自由に遊べなかったりしている子どもがほとんどでした。

１人で座っている子もいれば、納得いかないと蹴ったりかみついたりする子もいました。たまっていた感情が爆発したのかなと思いました。どうすれば良いのか悩みましたが、すぐに注意するより気持ちが落ち着くまで口出しせずに見守ることにしました。やってはいけないことを教えるよりも、その子の思いに寄り添うことの方が大切ではないかと思ったのです。

災害による被害は、家屋などの目に見えるものだけではないのだと感じました。子どもへの接し方は一つではないので、臨機応変に対応することが必要だと思いました。私は将来保育士になりたいので、今回のこの経験を生かしたいと思います。

千曲市　岡本瑚乃夏

（高校生・18）

校長ESSAY(終業式の話)

まつもとゆうき君のこと　―ありがたい話―

今から３０年ほど前のこと、まだ小さかった長男を連れて妻の実家、伊那市の春日城址公園を散歩したことがあつた。一望できる市街の向こうに南アルプスが美しく連なっていて、そんな景色を眺めながらついつい思い出に耽った私は、「お前が生まれる前、お父さんとお母さんはよくこの公園を散歩したんだよ。」などと息子に語りかけた。「ふーん」とでも言うと思いきや、息子「ぼく知ってるよ。」と、のたまふ。「でもお前が生まれる前だから。」と一応諭してやると「ぼく見てたよ。」と息子、たじろぐ私。そして息子は、次のように言つた。
「ぼく見てたよ。石に上に座って見てたよ。まつもとゆうき君の石の上だよ。」‥‥
「まつもとゆうき」？ 初耳だった。その石でまだ生まれていない自分たちの子が自分たちをじっと見ている。これは、あまり気味のいい話しではない。「まつもとゆうき君って、誰？」と訊くと、息子は「ぼく、知らない。」と答えた。妻に聞いても分らなかった。結局「まつもとゆうき」が誰なのか、今も謎のままである。以上は、うそ偽りのない実話である。

これ以後、名簿などを見るとつい「まつもとゆうき君」を探してしまう癖がついた。残念ながらこれまで「まつもとゆうき君」にお目にかかったことはない。（一度「松木祐樹」という名前に出会って一瞬色めき立ったことがあった。）もしかしたら、息子はテレビなどでそんな名前を小耳にはさんだだけかも知れない。でもこの奇妙な体験のため、「生まれ変わり」とか「輪廻」とかという現象を心のどこかで密かに信じてしまっている。
「生まれ変わり」や「輪廻」のことはひとまずおくとしても、この体験を通して、運命の不思議さについて思い至った。息子が生まれるためには、私と妻がどこかで出会わなければならなかったわけだが、そこには何の必然性もなかったという不思議さである。私事で、本当に恐縮だが、私は若い頃、クラシックギターを習っていたことがあった。先生の個人宅（「伊藤ギター教室」）で、週１回約３０分のレッスンを受けていた。レッスンの途中で次の生徒が部屋に入ってきて控えのソファーに座ることになっていた。そして、私の次の順番が、たまたまのちの私の妻だった。このタイミングが成立するためには、無数の偶然が折重なっていて、その微妙なバランスがちょっとでも狂ったらこの出会いは実現していない。実現していなかったとすれば、私の息子はこの世に生まれていない。

この有り得ない偶然の采配は、もちろん息子に限ったことではない。私を含めて、ありとあらゆる人々がこの世に生まれるためには、世代を貫いて繰り広げられる目も眩むような偶然の果てしない連関が成立していなければならない。このことを考えただけでも、今、私たちがここに生きているということは、何と有り得ないことなのだろうか。

「有り得ない」とは、言葉を換えると「有り難い」ということである。「有り難い」ことだから「ありがたい」のだ。私たちは、自分が今ここに生きていることが「有り得ない」＝「有り難い」ことであることを悟ることによってはじめて私たちは、自分が生きていることがいかに「ありがたい」かが解る。そして、「ありがたい」からこそ、私たちは、自分も他の人もかけがえのない存在として尊重しなければならないのである。